令和５年度 経済・マネジメント学群 総合型選抜

小　論　文　1/5

第１問

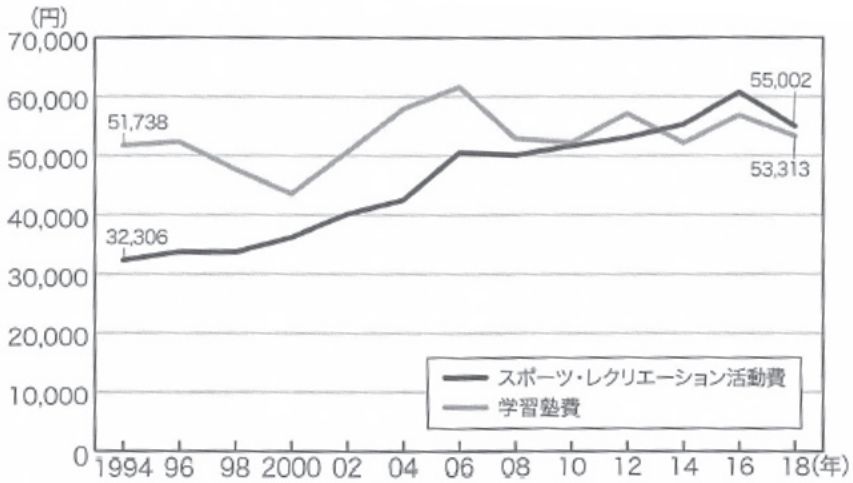
次の図は、小学校児童の体力と親の運動嗜好との関係を示したものである。この図から読み取ることができる子どもの体力と親の運動嗜好との関係について、200 字以内で説明せよ。

著作権の関係で図は掲載できません。

出典：長野 真弓・足立 稔　著「親の運動嗜好と子どもの体力との関連性の検討」日本発育発達学会、発育発達研究第 78 号、31 項、一部改

第２問

次の図は、公立小学校児童における年間の学習塾費と学校外スポーツ支出の推移を表したものである。図から読み取ることができる学習塾費と学校外スポーツ支出の変化について説明し、その変化をもたらしたと考えられる要因についてあなたの考えを論述せよ。なお、論述には「スポーツの産業化」という語句を用い、600 字以内で論述すること。



（注）値は公立小学校児童の平均

出典：清水紀宏　著「子どものスポーツ格差－体力二極化の原因を問う」大修館書店、2021 年、25 項

小　論　文　2/5

第３問

次の文章を読んで、下記の設問に解答しなさい。

筆者が中学生のころだったと思いますが、植木等の「スーダラ節」が大ヒットしました。「チョイト一杯の　つもりで飲んで　いつの間にやら　ハシゴ酒　気がつきゃ　ホームのベンチでゴロ寝　これじゃ身体に　いいわきゃないよ　分かっちゃいるけど　やめられねえ　アホレ　スイスイ　スーララッタ　スラスラ　スイスイスイ」と続いていくわけですが、読者の皆さんも、「わかっちゃいるけどやめられない」という目にあったことは多いのではないでしょうか。

身体に良くないことがわかっているのに酒やたばこをやめられないとか、ダイエットの敵なのについ甘いものに手が出てしまう、などといった経験のない人は、むしろまれだと言えるでしょう。これからお話しする「社会的ジレンマ」は、一人一人の個人ではなく、集団や社会全体が「わかっちゃいるけどやめられない」状態だと言えます。つまり、皆が何をしなければならないかをわかっていても、イソップのねずみたちと同じように、必要なことができないために起る結果に苦しんでいる状態です。

このことを理解するために、いくつかの例を考えてみましょう。

筆者は今日も、渋滞の中をマイカーを使って大学まで通勤しました。渋滞に巻き込まれてイライラしながら、「皆が電車やバスを使って通勤してくれれば、こんな渋滞が起らなくて楽ができるのに」などと、虫のいいことを考えてしまいます。渋滞をなくすためには、皆がマイカーを使うのをやめて、よほどの事情がないかぎり電車やバスなどの公共交通機関を使えば良いことは誰でも「わかって」います。

しかし、筆者を含めて多くの人たちは、この「わかっている」ことをしようとはしません。他の人も一斉に公共交通機関を使うようになれば公共交通機関の整備が今よりもずっと進み、電車やバスを使っても今よりずっと快適に通勤できるはずです。そうなれば、皆進んで公共交通機関を使うようになるでしょう。しかし公共交通機関の整備が不十分な現在の状態のまま、自分一人だけがバスに乗り換えたところで道路の渋滞は解消せず、マイカーの中ではなく混雑したバスの中で渋滞に苦しまなくてはならなくなるのが目に見えています。

一人一人の人間が「わかっちゃいるけどやめられなく」なるのは、自分で自分の行動をコントロールできないからです。わかっていることをすれば、健康や魅力的なスタイルなど、自分にとって望ましい結果が必ず得られます。そうできないのは、目の前の誘惑に勝てないからです。ところが社会的ジレンマの場合には、一人一人の人間にとっては、「わかっている」ことをしたからといって、自分にとって望ましい結果が得られるわけではありません。一人の人間がマイカー通勤をやめてバスで通うことにしたからといって、道路の渋滞がなくなるわけではありません。それどころか、快適なマイカーの中ではなく混雑したバスの中で渋滞に耐えなくてはなりません。しなければならないと「わかっている」ことをした人は、そうしなかった場合よりももっとひどい結果に苦しむことになってしまうのです。

小　論　文　3/5

意志を強く持って「わかっている」ことをすればするほどひどい目にあってしまうという点で、社会的ジレンマは、「いつのまにやらはしご酒」という一人ジレンマよりも、その解決がずっと困難です。現代社会で私たちが直面する問題の解決が時としてきわめて困難になるのは、それが、一人一人が「やめられない」問題なのではなく、このような社会的ジレンマのかたちを取っているからです。

社会的ジレンマとは

ここでまず、「社会的ジレンマ」という言葉の定義をしておきましょう。

社会的ジレンマでは、一人一人の人間が、こうすればいいと「わかっていること」をするかどうかを決めます。先に使ったマイカー通勤の例では、公共交通機関を利用することが、渋滞をなくすためにすればいいと「わかっていること」です。これを「協力行動」と呼ぶことにします。皆が協力行動をとって公共交通機関を利用すれば、渋滞はなくなります。

これに対して、渋滞をなくすために望ましい行動だとわかっていてもマイカー通勤をあきらめない人は、「非協力行動」をとっている人です。

社会的ジレンマというのは、こうすれば良いと「わかっている」協力行動を取ると、その行動をとった本人にとっては、その行動を取らなかったときよりも好ましくない結果が生まれてしまう状態だと定義されます。マイカー通勤からバス通勤に変えた人は、満員のバスの中で渋滞に苦しむことになってしまい、マイカーの中で音楽を聴いたりしているよりももっと大変な目にあってしまうという意味で、社会的ジレンマを構成しています。

このことをもう少し正確に定義すると、次のようになります。

社会的ジレンマでは、

① 一人一人の人間が、協力行動か非協力行動のどちらかを取ります。

② そして、一人一人の人間にとっては、協力行動よりも非協力行動を取る方が、望ましい結果を得ることができます。

③ しかし、全員が自分にとって個人的に有利な非協力行動を取ると、全員が協力行動を取った場合よりも、誰にとっても望ましくない結果が生まれてしまいます。逆に言えば、全員が自分個人にとっては不利な協力行動を取れば、全員が非協力行動を取っている場合よりも、誰にとっても望ましい結果が生まれます。

次に、いくつかの例を使って、社会的ジレンマについてもう少し詳しく説明することにしましょう。

共有地の悲劇

社会的ジレンマの例として歴史的に最も有名なのは、ギャレット・ハーディンが紹介した「共有地の悲劇」の例です。

産業革命以前の伝統的なイギリスの農村には、コモンズと呼ばれる共有の牧草地がありました。日本の農村の入会地にあたるものです。農民たちはこのコモンズに羊などの家畜を放牧し、日常の用にあてていました。

農民たちが自給自足の足しにするために共有地を利用している間は問題はなかったのですが、産業革命の結果羊毛に対する需要が急増すると、自分たちで使用する限度を超えてなるべく多くの羊を放牧し、より

小　論　文　4/5

多くの利潤を得ようとするようになります。一頭でも多くの羊を育てればそれだけ利潤も多くなるわけですから、農民たちはあらそってより多くの羊をコモンズに放牧するようになります。

問題なのはあまりに多くの羊を放牧すると牧草が足りなくなり、羊たちが牧草の根まで食べてしまうため、次の年に牧草があまり育たなくなってしまうことです。ですから一定の牧草地から最大の利潤を得るためには、羊の数を一定の限界の中に押さえておく必要があります。牧草地が一人の農民のものであれば、その農民は当然、自分の羊の数をその限度内に押さえておくでしょう。

ところが共有の牧草地では、それぞれの農民が自分の利益のみを考えている限り、羊の数が限度を超えてしまうことになります。この点を、もう少し具体的に考えてみましょう。

限度を超えて羊を増やしたときには牧草の再生量が減少するので、羊の生育が悪くなり、一頭あたりの利潤が低下します。例えば１００人の農民がそれぞれ１０頭の羊を共有の牧草地に放牧し、一頭あたり一万円の利益をあげているとします。ここに誰かが一頭の羊をさらに加えると、一頭あたりの利益が１００円分だけ減少するとしましょう。この羊を加えることにより、羊の持ち主が今まで持っていた羊からの利益は１０頭×１００円＝１０００円分だけ減りますが、新たな羊から９９００円の利益をあげることができるので、差し引き８９００円の利益の増加になります。

この羊の持ち主にとっては、このように、新たに一頭の羊を加えることで、今まで以上に多くの利益をあげることになります。しかし農民全体を考えるとどうでしょう？１００人の農民がそれぞれ１０頭の羊を飼っているわけですから、牧草地全体では１０００頭の羊がいます。この１０００頭の羊のそれぞれから得られる利益が一頭あたり１００円分だけ減少すれば、全体では１０００頭×１００円＝１０万円の減収となり、新たに加えられた羊から得られる９９００円の利益を足しても、結局は全体で９万１００円の減収になります。もし一人の農民が牧草地の全体を経営していれば、このように、損をすることがわかっていながら羊を増やすことはしないでしょう。

「共有地の悲劇」は、一頭の羊を増やすことによる全体の損失（１０万円）が、そこから生まれる利益（９９００円）よりも大きいにもかかわらず、損失が農民全体に拡散してしまい、農民一人あたりの損失（１０００円）が利益よりも小さくなってしまうために起るわけです。それぞれの農民にとっては自分の羊を増やした方が自分の利益が大きくなります。しかし全員がそのようにして羊を増やし続ければ結局は牧草地が荒廃してしまい、元も子もなくなってしまいます。

山岸俊男　著「社会的ジレンマ―「環境破壊」から「いじめ」まで」PHP 研究所、2000 年、14-20 項、一部改

小　論　文　5/5

設問（１）

「社会的ジレンマ」とは何か。200 字以内で説明しなさい。

設問（２）

あなたが社会的ジレンマに当てはまると思う具体的な例をひとつあげなさい。なお、その具体的な例はあなたの身近な事例でも、あるいはテレビや新聞などで見聞きした事例でも、どのような例でもかまいませんが、上記の文章に書いてある例（例えば羊の放牧など）をあげてはいけません。あなたがあげた具体的な社会的ジレンマの例について、それがどのような意味で社会的ジレンマに当てはまると思うのかを説明し、さらにどうしたらその社会的ジレンマを解決することができるか、あなたのアイディアも説明しなさい。なお、600 字以内で説明すること。